

「満願」

太宰治

お医者の家では、五種類の新聞をとっていたので、私はそれを読ませてもらいにほとんど毎朝、散歩の途中に立ち寄って、三十分か一時間お邪魔した。裏口からまわって、座敷の縁側に腰をかけ、奥さんの持つて来る冷い麦茶を飲みながら、風に吹かれてぱらぱら騒ぐ新聞を片手でしっかり押えつけて読むのであるが、縁側から二間と離れていない、青草原のあいだを水量たつぷりの小川がゆるゆる流れていて、その小川に沿った細い道を自転車を通る牛乳配達の青年が、毎朝きまつて、おはようございます、と旅の私に挨拶した。その時刻に、葉をとりに来る若い女のひとがあった。簡単服に下駄をはき、清潔な感じのひとで、よくお医者と診察室で笑い合っていて、ときたまお医者が、玄関までそのひとを見送り、

「奥さま、もうすこしのご辛棒しんぼうですよ。」と大声で叱咤しったすることがある。

お医者のお奥さんが、或るとき私に、そのわけを語って聞かせた。

小学校の先生の奥さまで、先生は、三年まえに肺をわるくし、この

ごろろずんずんよくなった。お医者是一所懸命で、その若い奥さまに、いまがだいじのところと、固く禁じた。奥さまは言いつけを守った。それでも、ときどき、なんだか、ふびんに何うことがある。お医者には、その都度、心を鬼にして、奥さまもうすこしのご辛棒ですよ、と言外に意味をふくめて叱咤するのだそうである。

八月のおわり、私は美しいものを見た。朝、お医者の子の縁側で新聞を読んでいると、私の傍に横坐りに坐っていた奥さんが、

「ああ、うれしそうね。」と小声でそつと囁ささいた。

ふと顔をあげると、すぐ眼のまえの小道を、簡単服を着た清潔な姿が、さつさつと飛ぶようにして歩いていった。白いパラソルをくるくるつとまわした。

「けさ、おゆるしが出たのよ。」奥さんは、また、囁く。

三年、と一口にいつても、——胸が一ぱいになった。年つき経つほど、私には、あの女性の姿が美しく思われる。あれは、お医者のお奥さんのさしがねかも知れない。